京都労研ニュース
No. 6
（一九七〇・五・一〇発行）

連絡先
京都市北区小山
中溝町14の7
中村太郎

「地域労組結成」に向けて
第4回連続講座終る

京都労働運動研究会の主催による連続講座、第4回、「欧米の労働運動史―労働組合と政党」が神原氏より報告があり、続いて討議された。

斗いに労働組合と政党の区別があるのかどうか。政党とは何なのか。労働組合とは何なのか。指導とは何なのか。団結とは。等々の討議がなされた。

以下がその報告です。

＝報告＝ 労働組合と政党
―ヨーロッパ労働運動史―

神原正史

ヨーロッパの労働運動における異色、労働組合と政党の関係をぬきに考えることができない。それは、まさに労働組合の成立過程と不可分の問題としてあり、又、現在、我々が労働運動を展開する場合においても必然的にぶつかる問題としてあると考えるからである。

とくに革命期における労働者階級の斗いが、これらの関係について検討すべきものを見出すことができる。

そこでロシア革命期から一九三〇年までのヨーロッパにおけるの労働運動の中で見つけられる。

ロシア革命の成功をもってはじまったヨーロッパ労働運動のこの時期は、ヨーロッパ諸国での労働運動の高揚を生み出し、同時に革命運動の波が、ロシア革命を軸として展開されたが、その結果は成功とならなかった。この過程

〈次頁へ〉

で、多大な成果と教訓をもたらしつつも、大きく見れば労働運動が二つに分裂するのである。これは、とりわけ労働運動を指導し、労働者の組織に影響力を持っていた指導者の問題でもあったろう。この分裂の原因は、当然にもロシア革命をめぐってであったし、革命後のさまざまな困難な過程を歩み始めていたソビエト政権に対する見方をめぐってであったといえよう。

その一つは、ロシア革命の成功によるソビエト共産党指導者の決定に対する無条件の支持であり、もう一つは革命――ロシア革命――の断罪であった。すなわち、この事により、労働運動の第二の分裂――労働組合の目指す要求の目的と将来の世界の問題の対立であった。だがヨーロッパの労働運動は、ロシアのプロレタリアートの蜂起を支持して革命的闘争を展開するのである。すなわち、フランスに於る、リヨン・パリの大衆ストライキ、イギリスのショップ・スチュアート運動の展開、イタリアのトリノを中心とする工場委員会運動、ドイツに於るベルリン・ミュンヘンの労働者の蜂起である。そして特に、ドイツの労働者の斗いの中に、政党と労働組合の関係、労働運動の推進者――組合と革命政党の影響力の問題が顕著に表われてくる。すなわち、ミュンヘンの労働者の斗争の勝利が、革命的オプロイテが中心となったベルリンの労働者の蜂起を呼び起した。このことによって労働運動の高揚がもたらされ、多数派社会民主党（MSP）――労働組合の対応が迫られたのである。（次頁の※印へつづく）

◆ 若干のメモ ◆

政党と労働組合、

○ヨーロッパに於てはレーニン時代にすでに、政党と労働組合の分化が始まっている。それは何ら政党が組合主義から自由であることを意味してはいない。むしろ労働組合がそれ自体、資本主義社会における行動の領域を持ったが故に、その思想に似せて政党を形作ったのである。（社会党、労働党など）

だから、政党と労働組合の分化は、革命的政治運動と労働組合運動の分化としてとらえる必要があろう。

いいかえれば、労働組合には以前、ヨーロッパに於て特にそうであったように、それを基礎にして革命的左派が登場するといった時期をすぎ、労働者の利害を徹底的に守る組織としての意義を持たなくなってきているといえるだろう。

けれども労働者大衆にとって、日常的利害を守る組織は労働組合以外の何ものでもないだろう。このことから、労働組合と政党との関係をみちびき出す必要がある。

○イギリスのチャーチスト運動

チャーチスト運動は、労働者階級の失駆的な政治斗争であった。（マルクス）労働者階級の政治斗争は、その後の組合発展の過程で後景にしりぞき、政党がとって代った。だが労働者の政治斗争は、ヨーロッパ戦争の機会にたびたび登場した。（特に第一次大戦後にけんちょ）

○組合――政府・資本家の攻げきに対し、労働者大衆の利益を守るという一点に力点が置かれるべきではないか。

○革命党派――労働組合機関に依拠することをやめる必要がある。

以上

※そこで、MSPと独立社会民主党は、社会主義共和宣言をし、同時にMSP指導部と労組官僚は支配階級と同盟を結び、ドイツがロシア革命と歩調を合わせることを回避しようとした。これに対して、左派急進主義諸グループは共産党を結成し、ドイツ各地で生まれている労兵評議会こそ、新しいドイツを担うものとして評価した。だがドイツの労働者、労働運動の推進者には、この対立がなぜでてきたのか理解できなかった。「労働者には、この要求の目的と意味がわからなかった。というのは、ドイツの労働運動の推進者はみな、もっとも急進的なものであり、一九一四年以前には、将来かくとくされるべき民主主義共和制は議会制民主主義だと考えていたからである。」（アーベントロート）この例からも、現在的な労働者組織と政党の関係を新たに考えねばならないと思う。

討論

―司会―　革命党派と労働組合の関係ということで出されているわけですけど、戦後の総評運動の中で社会党との関係が洗い直され出している。しかも先日の講座で70年代が政党別に再編されるという話があった。こうしたことからも報告をたたき台にして討論していただきたい。

―A―　反戦青年委の登場というのは、政党と労働組合が政治闘争の中で分離していった、一言でいえば、政党の政治闘争代行主義に対する批判として登場してきたということですか。

―K―　そういうこともあると思うんですけど、政治闘争がなかったということもある。

―A―　既存の政党と労働組合の問題をつっ込んでみることと、我々と新左翼諸党派の関係を検討することだ。それは（中略）反戦青年委をどう位置づけるのか。

―S―　労働組合の任務を明らかにするというのは賛成ですが、「資本家の攻撃に対して労働者の利益を守る点に力点がおかれるべきではないかという点、どうかな。それが主たる任務だといわれてきた。一方で、労働者階級は革命の母胎だという風に言われている。その点労働者階級の利益を守る一点に力点がおかれるというのはどうか。

―K―　「利益を守る」意味が問題だ。僕は共産党4の場合、将来の革命の問題にすりかえているのではないかと思うんです。そうじゃなくて、その時点における本当の意味での利益を守るということがあるんじゃないか。

―S―　改良闘争を自己目的化していたら本当の意味で労働者の利益は守れないという事が言われているんだが、そういう意味では労働者自身が変革を志向していかなければ利益さえ守れないというのはそういう事だと思うんですが……

―K―　ロシア革命以降こういう図式があったんじゃないか。戦争があって危機が到来する。すると労働組合自身が機能マヒに陥る。そこで労働組合じゃ埒あないから、工場ストライキ委員会とか闘争委員会が作られて、それと、それを傾斜するところの革命政党という関係、それがロシア革命で一つの成功をみたことで大きな重みになっている。で今はどうかという問題があると思う。

―S―　大衆の利益を守るという点ではないんだというところに、反帝労組の存在意義があるんじゃないか。

―K―　政党がこれまでの労働組合に依拠してきた。この影響力をどう払拭するかというときに、組合というのは先に述べた一点に力点がかかれるべきではないかと考えたわけです。

―A―　いずれにしても、即物的な意味だけで言っているんじゃないんだろ？

―K―　そうです。チャーチスト運動なんかそうだと思う。労働者の政治発言の場（普通選挙権）を要求していき、その中で労働者と結合していった。その結合を権力がぶったたく、それに対して、それを合法的に認めるという闘争を始めた。それが組合になった。その段階で、さまざまな労働条件を変えるという闘いが起きた。こうして政治闘争が後ろに退いちゃった。後ろに退いた政治を試金石における労働者の代表にさせた。ところが危機の時代になると、そういう労働組合とか政党とかが突き破って、労働者の革命的な闘争が勃発している。その5ことを考えると労働組合の問題としてどうなのかという―ことなんだけど、答といっても出しきれるというもんでもないんだけど……。

―O―　感想ですけど、政府、資本家の攻撃に対し「という前半と「労働者大衆の利益を守る」という後半がピッタリしてないように思う。前に労働組合を作ろうとして総評へ行って組合の規約をもらってきてみた。目的の項に「労働者の経済的社会的政治的地位の向上と、究極的に労働者階級の解放をめざす」となっていると目指す

「と書いてあったんですけどね。何かそれの方が積極的な感じを受けるんですけど……

―K― うん、それの方が積極的な筈なんですね。ところが今の労働組合がそんなこと出来るかといったら出来ない。むしろそういう幻想をのっける方が危険なように思う。

―M― 知事選の中で、その関係が端的に現われていた。分裂かけられた、合理化かけられた、その時、「知事選に勝つ事が、これに勝つ道や」という論理になる。そして一切の職場闘争を放棄した知事選に入る。それが現在に於る労働組合の政治の表現なんだ。それで勝ちえるんだという論理ね……

―A― 正しいんちゃうか

―M― 何で?

―A― 議会主義を前提にしとればや。相対的な問題として言えば、自民党が出るよりもよい。地労委の問題にしても、教員の処分の問題にしても、相対的な利益の上に立ったらえゝやんけ。

―M― 相対的であってもあかんのやと何で言えへんのかや。

―A― 二ナ川を勝たすというのは、民族民主革命から言えば戦略化される。ということとちがうのか。

―M― 自民党勝っても二ナ川勝っても変らんのとちがうかということだ。

―B― この間、南米の方で選挙で騒動が起っただけど、ちょうど佐藤栄作を選ぶか、二ナ川を選ぶかというような選挙だった。日本で首相公選制になったらあゝいう状況になる可能性があると思う。首相公選制になると今、言われた相対的な問題もハッキリするのではないか。

―K― 実際のところ、組合で二ナ川問題はどうなったのか?

―C― 僕とこでは、二ナ川選挙で統一してやろうという呼びかけがあって、「二ナ川はんのことやからえええやろ」という事でのっていった。ところが青学連が提

約を勝手に作りよって、その中に「反戦青年委を排除していく」とあったので、「うちとこでは運動方針上、反戦青年委は排除できない」といってつっぱねた。ところが支部の方ではだいぶ切崩されていた。組織的には動けなかった。その中で、全○○の反戦派=関東勢を呼んでこようやないかという事で各職場には入っていって貰った。その中で、世の中を変えるとか革命とかいう事になると、オレらとしては難かしくてわからんのやという。だけどビラ入れしたりする中でわかるんやという事で支部段階でやっていった。僕らとしてもハッキリしていなかった。

―M― 我々の勝利への道が指し示しえていない。

―K― それともう一つは影響力がないことだ。

―A― 俺の場合、二ナ川のビラまき一回やったんやけど、さまざまな組合指ド部の動転を見た。例えば二ナ川なんかなんやねというてた奴がとたんに二ナ川、二ナ川と言いだして春斗ほったらかしたりした。いずれにしろ、二ナ川が通ることによって政治情勢の一刀の分解が明確になる。それとハレンチ云々を越えて、一定政策論争という事を呈したのを見たという感じ。

―A― 反戦青年委の位置づけやけど、政党の政治斗争代行主義、労働組合の経済主義という分化が進む中で、それに対する批判として出てきたと僕は結論づける。共産党の前衛神話は60年安保斗争で大衆的に打破られた。民同に対する幻想は三池斗争で打破られた。65年日韓斗争では社会党、共産党ともに見事に排外主義に陥った。日本帝国主義の海外侵略の第一歩なんだという位置づけは、新左翼諸党派すべてがした。全部したけれども反帝の中身を深い質でとらえる事がなかった。なぜならば、日韓問題を中心に、むしろ斗かわずにベトナム問題に全部流れていったからだ。ブント含めてだ。この中で労働組合青年のフン出があった。 次に67年からの学生運動だが、それまでは「奴らは街頭でやって学園は逃げ込む場所や」と言われていたが、そこのところを根

的につきつめていった。ここから労働者に対する影響がでてきた。労働運動はこの過程で組織崩壊の芽がでてきた。だから70年代はこの組織崩壊が完全に実現化していくであろう。そしたら、その時点で、新たな労働者運動が必ず登場する。61年からの過程で登場した地区反戦運動はというと、極論すれば広義の意味で市民運動である。だが市民運動がもっともっとどろどろなおされていくことによって労働運動として更に深まっていく。

最初の政党との問題だけど、この中に政党の人がいると思うけど、その人はどういうふうにこれをしようとしているか聞きたい。大阪の電通労研に関してだと、あれはブント労研だったからだめだったと思う。長征社研の場合、守る会の中に名派が参加している。電通労研は大衆運動体としての明確なものをもっていなかったということだ。むしろ党派の大衆運動であった。それで俺たちが気をつけなければならないのは、「京都で作っている地域労組はブント労組やで」という……中傷ならよい、レッテル貼りなら問題くないけど、運動の内容からいうと、理論的にも位置づけをきちっとやっておく必要がある。僕自身は当面どの党派にも入らない。というのは、2年前にあっちこっち不山東ったとき、呼びかけが大衆運動体と長征社研と電通労研だった。そこに党派の幹部が出席するという現象も生じた。これまでの概念と、政党が呼びかけて大衆運動体が来なというこだ。だから何というべきかたことやろと思った。しかし、この現象は過渡期の状況のものとして僕はみる。ということは日本の大衆運動体がいかにおくれているかということだ。

—B—共産党も「労働運動活性化反対」といっているけど、この反帝労連について何も言えない。

—A—それはまずトロツキスト排除やろう。

—O—ニナ川選挙のことなんですけど、むずかしい点で我々が不明確であったという話があったんだけど、それとは別にゼニ、カネの問題でニナ川ではダメだという点が僕らで見分けられないのかなと思うんです。第一回の時、話したタクシーの運転手の話ですけど、運ちゃん曰く「ニナ川府政は低所得者の生活を守っているといわれているけど、わしらにしてみたらそう思わへん。ニナ川府政は医者と中小零細企業主の政治ですよ。わしらの生活を守ってくれとへんぞ」と。僕はそうだと思う。

—A—それは実際の問題としてそうやろうな。野良犬といわれる者はつかんでいない。ニナ川問題で重要な問題かなあ。

—M—重要だと思う。我々のまわりがそれでこり固っている。

—C—だけど、「戦線」とか「前進」とか「赤旗」をズラッと前に並べたら、「赤旗」が一番わかりやすい。

—S—話を変えると、政党と労働組合の関係というと何か二元論的で……

—A—いや、その関係をオレたちの場でどうしようということや。さっきの政党の政治斗争代行主義の話を我々に向い返すと、我々自身が労働者の解放とは何なのか、日本の革命とはどうなのかということを我々自身が真剣に考えなければならないということやろ。でないと二元論に陥ってしまう。普通、組織の問題として大衆路線とかいわれるけど大衆操作路線なんだ。そんなことだったら資本の方がうまい。

—B—組合民主々義とか大衆路線とかは、うちの組合でも叫ばれている。ところが大衆路線が定着するためにはあと10年かゝる。だからあと10年間役員をやめられないと役員がいうんです。ふざけるなということです。組合民主々義をとるなら執行部はたゞちにやめたらよい。そしたら一人一人の組合員がいやでも主体者になざるをえない。僕はこんど執行部を下りて一組合員としてやろうとしている。

委員長をのりこえるようなことをするかもしれない。そうしたときに執行部が許すかといったら、絶対に許さないんだから。

―A――指ド部が現在、大衆闘争というとき、ワンスカワンスカするのを指ドして方向づけられるか、それとも低ぶか二つしかない。指ド部が大衆闘争なんて、こいやくてこいやくて出せるもんちがうねん。

―S――そういうときに限ってスローガンがいっぱい並ぶ。

―A――財政なんかでも現場まで行ってやっとこや。それで賃金要求もバラバラになってもかまわない。

―B――僕の現場でワンスカワンスカなったことがあるんですけど現場によって4ヶ月要求するところがあれば、2ヶ月要求するところがある。そして4ヶ月要求したところが大量労働力で定期大会になったんです。そうすると今までの経験者が登場して「分裂したらあかんから」といってまとめようとした。

―A――そこなのよ。奇妙に「まとめんとあかん」という発想がある。定着しきっている。4ヶ月要求の現場に同交をもちこむ。2ヶ月要求の現場で同交させないことだよ。指ド部は。　こんな例がある。二人の女子労働者が、一組と二組に分れざるをえなかった。一組の人が、二組は「おはようございます」からお茶くみまでやっているけど、こちらは朝から晩まで黙っている。そうすると統一したことにならず、私はやりすぎいという。それで、それはそれでいいやないか、ただ、昼休みの時間なりに一緒にちゃんと話しあってみることが必要やといったんやけどな。資本はそれの方が困る。喜ぶひっついているんやから。だけどこれは指ドの問題や、指ドの問題の本質は思想の問題や。民同なんかは、この思想の問題を教えようとするとバンとくる。暴力問題なんかその典型や。

―M――要求で同盟できないということは思想的な問題になってくる。このあいだ組合の指ド者と話していると、「反帝労組というのは、そう考えると政党とどうちがうんや。政党と同じやんか」という。「そういうふうにいわれると政党と変らへん。だけどそれはそうとしてこの概念や。ということは政党の任務はもっとちがうところにある」と言った。一人一人が、自分の正史的な位置と世界的な位置を明らかにせんならん。そうなってくると政党はより一段のことをせんならんようになってくる。この点で政党支部の自由とか、4ヶ条声明のときに民同が政党の支部を排除すると言ったんだけど、そこらへんでは大部整理されてきているのではないかと思うんです。

―K――そうすると、提起したものとしてますますこれでいいんじゃないかという確信をもつ。

―A――だって、労働者を無視してやるといわれたら傍からこと知前にしてもこやなくてもやるやいということ。※ささいな問題の中に階級闘争の全局面の中に位置づけられるかどうかだ。京大の女子寮で水道代、ガス代をめぐってあらそわれているけど、大学は水道代全額か…ガス代は、エーと半分負担しますといっているけど、それでも寮生は頑張って銭湯に行っている。何を見ているということだ。現成の運動やったら、「これで一定の前進をしました」やろ。

―B――僕、思うんですけど、トイレットペーパー一つで大闘争をしたい。

―A――賃金が一番、重要ですといわれる。※※※そして賃金さえ上ったらいいのですなんて、そこまで政党になるやろ。ここまで政治で、ここまでが経済で、俺たちは賃金さえ上ったらいいのですなんて、そこまで政党さんが力にしてくれんでもエエやい。ということにならへんか？

―D――今まで、そうさせるために、一定の枠の中にはめるために政党との関係が取沙汰された。

―B――一般に政治闘争といわれるけれども、全部階級闘争のように思うんだけど。例えばパン一つで争っても階級闘争だと思うんだけど。

―A――そうだ。階級闘争というとき、※※※その他はわざわざ付帯要求といわれる。

―M――安保反対も付帯要求になっている。

M――日共の諸要求路線というのはそれをもっと歪曲したものだ。この職場ではこんなたくさん要求があります よというのが成果になっていて、その要求をどう 汗うのかというのは成果にならない。そんなバカな話があるか。

―A―○○でやっている。守る会を作った。それが二組の中へは入った。は入ったらダメなんだけどね。中へは入って草むしりなんかやらされている。

我々の運動だけど、それぞれの構成員がそれぞれの斗いをやっていくとき、いけるやつは残るし、いけないやつは消えていく。又、戦術は三ツ出たとする。三ツのうち一ツどれかを多数決できめるとかいうことにならない。自分で選ぶしかない。「労働者は弱いから団結すんのやないんや。団結したら強うなるからするんや」と言われた。客観的論理としては弱いから団結すんのや。客観的論理をキューと主体の中へ入れたら……

とにかく団結より前に、こういう対決が資本との前にあるんやろ。ほんなら本人にしたらやらざるをえない。やりかけたらオレ一人より二人三人の方がということやろ。そこへ還元せんとしようない。

―N―それ、もうちょっと還元したら、こういう社会を作るために団結すんのや、いうのと、オレら抑圧されてるし団結すんのやいうのとどっちが強いか。

―A―そういうことがな？？